

A47/11

女子生徒の特性を生かした自立への取り組み

— Bunkyo Frontier Spirit —

岡室 薫 (広島文教女子大学附属高等学校)

1. はじめに

広島文教女子大学附属高等学校は創設者である武田ミキの、戦後の軽薄な社会風潮に流されることなく、正しく強く明るく生き抜く「誠に徹した堅実な女性」の育成こそが時代の急務であるという強い意志のもとに、昭和23年に創設された。以来「心を育て人を育てる」という教育理念のもとに、一貫して女子教育を行ない、地域にも評価されている。しかし現在全国的に共学化が進み、志願者の女子校離れが起こっている状況があり、広島県も例外ではない。そのなかで、女子校の特性を生かした指導により、建学の精神を「自立」ということで具現化することが、学校活性化のツールとなる道を模索している。本研究は『誇りうる学園をめざして』～前姿教育の実践を通して 自立した学園生を育てる～という平成22年度全学園目標をブレイクダウンした高校実践目標『自主自立指導（気づかせる・感じさせる・考えさせる指導）』の確立の一つとして行った「Bunkyo Frontier Spirit」（以下「BFS」と略称）という教育実践の報告である。

2. 仮説と目標

女子校の特性を生かして本校の生徒をさらに成長させる為に必要なことは、「コミュニケーション能力を伸ばす」とことと「自立度を高める」ことであると結論づけ、この2つの能力を伸ばすカリキュラム（BFS）の年間指導計画を作成し、実施した。このBFSの活動によって、生徒自身がコミュニケーション能力の伸長と自立度の高まりを自覚できるだけでなく、この2つの力がつくことで、他の分野においても能力を伸ばすことができるのではないかという仮説を立てた。つまり、BFSにより生徒が自立度を高めることが、進路やクラブ活動などの実績にも反映し、学校が活性化することをねらった。

3. 研究過程

平成22年度までの取り組み

平成19年度は、女子校の特性を生かした教育は何かを、校内で研究会（「ミキ学」委員会）を作って討論した。また、これと並行して教職員全員に「女性の幸せな生き方」と「文教生に今不足していること」、「ミキ学（後に Bunkyo Frontier Spirit に名称変更）に必要と思われる教育項目」についてアンケートを行なった。アンケートの結果から、本校生徒の能力を最大限伸ばす方法は、「生徒のコミュニケーション能力を高めること」と「社会で求められるリーダー的資質の涵養」、「自立度を高めること」の3点であると結論づけた。

平成20年度には、「生徒のコミュニケーション能力を高めること」と「自立度を高めること」の2点に絞った指導内容を作成することにした。まず、現状の教育内容でこの2点について何ができていないか調査した。それを踏まえて、学年ごとに育てたい力の指導内容を具体化した。基本的に、「①特設の時間はできるだけ使わない。②現在行なっている LHR の進路指導や朝の読書の時間の活用を考える。③生徒指導・学習指導・進路指導の流れと連動して指導できるものを目指す。」こととした。

平成21年度には、委員会名を BFS 委員会とし、個別の取り組みを試行していった。その反省をもとに、3年間の成長のモデルを作成し、各学年の年間計画を立案した。

平成22年度の取り組み

4月に前年度作成した年間指導計画を再検討し、各活動の実施内容を決めた。計画を具体化する際に心がけたのは、「①体験型、実習型の取り組みにより生徒の次の行動につながるものにする。②生徒全員が活動できるものにする。③生徒が一步踏み出そうとする勇気が出るものにする。」の3点であった。(資料1参照)

平成22年度に取り組んだ具体例 (紙面の関係上2つの取り組みを紹介する)**(1) 論理的に語る方法を学ぶ (朝の読書の時間等を利用して、論理的に語る方法を身につける)**

対象学年：全学年

活動目標：1学年 自分の考えを論理的に組み立てて、正しく表現する。

2学年 幅広い考えを理解し、自分の考えを発展させて表現できる。他の人の説明に対し、自分の意見を持つ。

3学年 自分から発信することで、良いコミュニケーション環境をつくることのできる。

活動によって生徒に期待できる成長：・自分の意見を瞬時に決める決断力 ・自分の意見を正しく表現する発信力 ・他の人の意見を正しく理解する力 ・立場の違う意見を論理的に説明する。・他の人の意見を比較して判定する力

実施内容：朝の読書の時間の10分間を使い、この活動を計画した。この活動のために参考にしたのは、三森ゆりかの著書である。氏は著書『論理的に考える力を引き出す』の中で、『『論理的』に思考したり、コミュニケーションをしたりする能力は、持って生まれた才能ではありません。論理的に思考するため、論理的にコミュニケーションをするためには、そうするための技術が必要なだけです。』「然るべきトレーニングをすれば、誰でも論理的にコミュニケーションできるようになるのです。」と述べている。三森ゆりかの「問答トレーニング」を参考に、学年の進行に応じてより複雑な内容を論理的に語る事ができていけるように計画した。1学年は、2人1組で答えの決まっていない設問(たとえば水泳は好きですか?)に「はい」か「いいえ」のどちらかに自分の意見を決め、その理由を論理的に述べるという活動をした。2学年は、3人1組で「あなたには小学生の子供がいます。あなたは、自分の子どもに携帯電話を持たせますか、持たせませんか?」などのように設問内容のレベルを高め、「はい」か「いいえ」の立場で2人がその理由を論理的に答え、残りの1人がどちらの意見に説得力があったか「ジャッジ」をし、その理由を述べるという活動をした。3学年では、3～4人のグループに分かれ、1人が「自分の長所は」などのテーマで自己分析を語り、他の人がそれに対して意見を述べる活動をした。

結果：どの学年でも生徒は活動に積極的に参加し、答え方の型を使って論理的に語ることを楽しんでいるようであった。各学年とも数日間という短期間の取り組みではあったが、特に1学年においては、この活動の後に実施した「1日担任」で、身につけた論理的な話し方を使ってクラスの前で話す生徒も多かったようである。

(2) 1日担任 (SHRにおいて、生徒が教師役を務める。)

対象学年：全学年

活動目標：全ての生徒が、クラス全員の前で自らの言葉で語る機会を持つ。

活動で生徒に期待できる成長：・人前で話すための準備と計画力 ・クラスの現状を見極め、クラスをより良い方向へ導くための状況把握力 ・連絡事項や自己の考えを分かり易く伝える発信力 ・対人関係能力 ・リーダー性

実施内容：クラスがある程度まとまってきた時期から、担任の代わりに生徒が交代で1日担任になる。連絡事項だけでなく、自分の考えをクラス全員に語る機会を持つ。語るテーマは学年やクラスにより変えた。

結果：普段の授業では、クラス全員の前で自分の意見を語るという機会は、非常に少ない。そのため、多くの生徒がかなりの準備をし、緊張して臨んだようである。実施後のアンケートによると、発表者だけでなく、クラスの聞いている生徒も発表から新しい発見をし、自分の考えを発展させることができたようだ。個人だけでなく、クラス全体の成長にもプラスになる活動であったと思われる。また、『『論理的に語る方法を学ぶ』活動で身に付けた問答法を利用した』とか、「他の人がその話し方を活用しているのを聞いて自分もそうしたいと思った」などの感想があり、他の取り組みが生かされていた。

4. 先進校からの学び

品川女子学院（東京都品川区）の女子教育における、「28歳の自分を意識させて、そこから逆算して今何をすべきかを考えさせ、行動させる」という「28プロジェクト」の実践を学んだ。特に、どうやって、生徒の心にスイッチを入れるか、その手法と実践を学ぶことを目的とした。

この学びから、BFSの指導に生かせる内容は次の3点である。

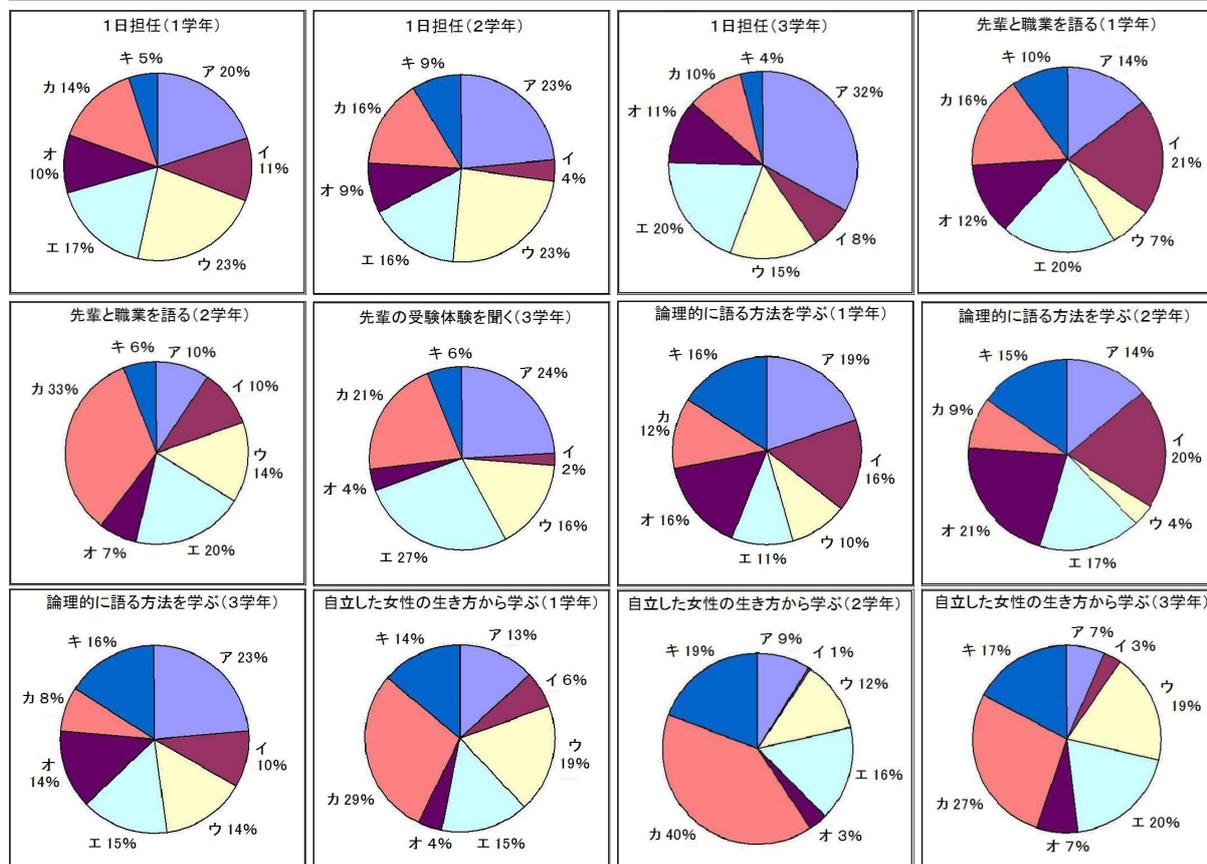
- (1) まず生徒の成長の到達点をはっきりさせることで、一つ一つの取り組みの目標が見える。
- (2) 入学後できるだけ早い時期に、自分で考え行動できるための枠を身につけさせる。
- (3) 一部の生徒だけでなく、全員の生徒が、どこかで活躍できたと実感できるチャンスを与える。

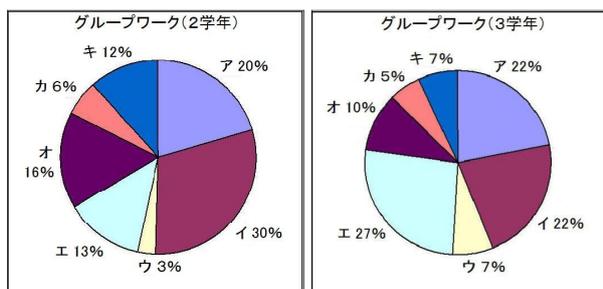
5. 年度末アンケートと分析（仮説の検証）

今年度の活動のまとめとして、BFS全体のアンケートを全校生徒に実施した。その結果の一部を紹介することで、仮説の検証をしたい。

生徒が個々の取り組みにより自分がどのように変化したと感じたかを調査した。質問文は「BFSとして取り組んだ取り組み（活動）が自分にとってどのような効果がありましたか。それぞれ次のア～キの選択肢から一つずつ選びその記号を答えなさい。」である。調査人数は、1年163名、2年142名、3年135名である。結果を次のグラフに示した。

ア この活動は自分の「コミュニケーション能力を高めること」と「自立度を高めること」の両方に効果があった。
 イ この活動は自分の「コミュニケーション能力を高めること」ができた。
 ウ この活動は自分の「自立度を高めること」ができた。
 エ この活動で、「コミュニケーション能力を高めること」と「自立度を高めること」の両方の必要性を意識した。
 オ この活動で、「コミュニケーション能力を高めること」の必要性を意識した。
 カ この活動で、「自立度を高めること」の両方の必要性を意識した。
 キ この活動で、自分の意識も行動も変化していない。





選択肢のアからウは BFS の活動が生徒自身の行動にまで影響を与えたかどうかを、エからオは生徒自身の意識に影響を与えたかを問うものである。この結果から、全ての BFS の活動が80%以上の生徒に何らかの影響を与えることができたことが分かる。行動面で「コミュニケーション能力」と「自立度」の両方が向上したと評価した割合(グラフのア)が高いのは、「1日担任」、「論理的に語る方法を学ぶ」、「グループワーク (KJ 法などを使用したグル

ープでの課題解決学習)」など生徒がその活動で行動した割合が高いものであった。意識面で「自立」の必要性を意識した割合(グラフのカ)が高いのは、「先輩と職業を語る」と「自立した女性の生き方から学ぶ」のように、社会で活躍している先輩から学んだ場合である。「論理的に語る方法を学ぶ」は主に「コミュニケーション能力」の向上のための活動であったが、生徒の反応は、必ずしも「コミュニケーション能力」の向上(グラフのイ)に限定せず、自立度も含めて高まったと評価している。また、同じ取り組みでも、生徒の行動や意識に影響する内容が学年により違う。これは、取り組みを行なった時期にその学年の生徒が直面している状況によって左右されているように思う。

6. まとめ

1年間の活動を振り返り、BFS のすべての活動において8割以上の生徒に、「コミュニケーション能力」と「自立度」が向上した、またはそれが「必要だ」と意識させることができた。これは、この BFS の活動の目的の第一段階を達成できたといえる。この取り組みで、2つの力が向上したことが、生徒の他の行動面にプラスの影響を与えるかどうかは、これから経年調査をしていく予定である。また、BFS の個々の活動内容も、生徒のアンケートも参考にしながら、学年が上がるにつれて、自発的に自分で考えて行動に移していけるようにしたい。さらに、この2つの力が、授業やクラブ、校外のボランティア活動の場で実践できるよう、それらの指導方法も工夫していきたい。

謝辞

本研究において、品川女子学院において「28プロジェクト」等の取り組みを学ばせていただいた。あらためて関係諸氏に感謝申しあげる。

引用・参考文献

- 三森ゆりか著 (2010)『論理的に考える力を引き出す』 一声社
- 三森ゆりか監修 つくば言語技術教育研究所編 (2010)『イラスト版ロジカル・コミュニケーション』 合同出版
- 三森ゆりか著 (2010)『こどものための論理トレーニングプリント』 PHP 研究所

資料1 (これは2学年の年間計画)

学年	2年 実施月は、学年の状況に応じて柔軟に対応する。											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2学年で育てたい力	・自分を取り巻く環境(社会・学校・家庭)をよりよいものにしていくために、自分ができていることを考え行動できる力 ・幅広い考えを理解し、自分の考えを発展させて表現できる力 ・女性のワークライフバランス(WLB)を考えて自分の進路目標を具体的に定め、その実現計画と行動が実行できる力											
指導内容と企画担当	課題解決グループワーク(コジ)担任・岡室	文藝祭などの行事を牽引して、自主的な行動を仕組み評価する。(コジ)担任		進路希望により分けたグループで職務で活躍する先輩と「仕事」について話し合う(コジ)担任・山口	現在の習力は自分の未来への進路点であることの理解(大者択一問題に答える。友達にその理由を表現できる。3人1組でジャッジをする。(コジ)担任)	別の読書の時間に答える女性の話をする(コジ)担任	社会活動で活躍する女性の話をする(コジ)担任					進路希望により分かれ、今年卒業する先輩の受験体験を聞き、話し合う。(コジ)担任・山口・竹中
生徒のコミュニケーション能力や表現力、自立度を高める授業を工夫する。(コジ)担任												
一日担任を実施し、生徒の自主性を伸ばす指導をする(コジ)担任												

取り組みで主に育てたい力
 ・コミュニケーション能力(記号:コ)
 ・個の自立心を高める(記号:ジ)